

## 校舎建設工事に手抜き？

### 20年前の鈴西小・特別教室と管理棟

1987年に建てられた鈴西小学校の校舎の、鉄筋コンクリート柱の多くに強度が不足していることが、6月末に明らかになりました。市教委は7月から校舎への立ち入りを禁止とし、詳しい調査と対応策の検討を行なっています。この校舎は、多目的ホール、家庭科室、図工室、理科室の特別教室棟と、職員室、校長室、保健室、会議室などの管理棟がカギの手に配置されています。29本の柱のうち、強度測定検査で強度不足が少なくとも6本はありとの結果が出ていて、地震のさいの危険な事態が予想されます。

### 建設当時の施工や検査はどうなっていたのか？

この校舎建設は、ちょうど私が議員になった年で、議会での議論もよく憶えています。工事費1億9800万円の契約議案が出たので、私が入札の予定価格を聞くと、「1億9800万8000円」との答えで、びっくりしました。わずか8000円を切っただけの落札で、「談合」そのものでしたが、それは今回明らかになった手抜きとは直接関係はありません。工事を施工した近藤・杉之内JVは、前年度にも同じ鈴西小の普通教室棟を建てていて、こちらには問題が発生していません。では一体、何があったのでしょうか？

その当時は、教育関係の建設ラッシュが続いていて、この87年は校舎5件、体育館2件、前年は校舎6件、体育館2件、次の年は校舎4件、プール3件、体育館4件という、今では考えられないほどの工事を毎年かかえていました。その他に文化会館や武道館、クリーンセンターなどの大物も並行していて、この多忙な中での工事監督や検査の体制が十分だったのか、今から遡っての検証が必要です。特に、施工業者の責任は、20年も経っているからといって免れるわけにはいかないでしょう。

# ユニークなアイデア「消防救急車」

7月中旬に総務常任委員会で3ヶ所の県外視察に出かけましたが、その内の千葉県松戸市の消防署に配備された「消防救急車」が面白かったので、報告します。これは、1台の車に「消防車」と「救急車」の二つの機能を合体させたユニークなもので、車の色も消防車の赤と救急車の白が半々になっていて、出動時のサイレンも「ウーウー」と「ピーポー」を使い分けるのです。



松戸市は救急出動が年々ふえてきて、現場到着「5分救急体制」が難しくなってきました。中でも「六実

運転席の後ろが救急、後部が消防ポンプ

消防署」は2本の鉄道で分断され、他地区からの応援が来にくい所で、そこで1台の救急車を実質2台に増やすことにして、消防救急車を導入したのです。その結果、現場到着時間が平均4分54秒と、36秒短縮されたとのこと。

このユニークな車が、注目はされるものの全国に普及しないのは、1台に2台分の機能を詰め込んで窮屈なこと、救命士が乗る「高規格救急車」でないことなどの問題があるからとのこと。しかし、発想の転換というか、新しいことに挑戦しようという精神には、学ぶべきところがあります。

---

## 国保の人間ドック・メタボ健診を受けました

毎年1回、人間ドックで健康状態をチェックしていますが、今年からは「特定健診」（いわゆるメタボ健診）も兼ねることになりました。ウェストが男性では85cm以上あると、健康指導の対象になります。

私の受診結果は、胃カメラや心電図などは異常なしでしたが、「ウェスト」「中性脂肪」「 $\gamma$ -GTP」「尿酸」などが基準オーバーで、肝臓に黄信号といった感じです。肥満度をあらわす数値「BMI」も赤信号の25ギリギリの24.9で、最近会う人ごとに「太りましたなあ」と言われる現象が、数字で裏付けられました。これは大変と、毎日早起きしてウォーキングに励んでいますが、体重は横這いです。平生往生、「メタボは1日にして成らず」です。

# 人間に「人格」、都市には「都市格」

7月25～27日に大阪で開かれた「第50回自治体学校」3日目の講演で、元「上方芸能」編集長の木津川計氏の話をお聞きしました。以下はその要点。

大阪生まれ・大阪育ちの木津川氏は、大阪の地位とイメージの低下を憂い、何とかして大阪の「都市格」を向上させようと提唱する。「都市格」とは、人間に「人格」があるごとく、都市にも「都市の品格」があるという造語である。高い人格者はゆたかな教養の持ち主だ。同様に、都市にとって、都市格を高める要件は、ゆたかな文化に他ならない。具体的には 文化のストック、景観の文化性、発信する情報、の3条件によって決まる。

## 文化は都市の「基本的インフラ」である

京都、神戸と比べて、大阪の都市格が格段に劣るのは、この3条件をどんどん切り捨ててきたからである。そして今、有力企業がつぎつぎ大阪から東京へ本社を移し出し、経済的な「都市力」も衰退の一途をたどっている。そこに輪をかけてタレント橋下知事が、さらに文化を切り捨てようとしている。木津川氏は、文化都市をめざさねば、大阪の未来はないと警告する。

この話を聞いていて私は、わが鈴鹿の町はどうだろうかと考えました。都市格を高める3条件が鈴鹿は元々弱いことに加えて、最近図書館予算の大幅な削減や公民館の人べらし、スポーツ施設の民間化などが進められています。また在来の中小商店が姿を消し、大型店とパチンコ屋とコンビニばかりの町になってきました。鈴鹿市も文化行政を強めなければ、大阪のような品格のない都市になってしまうのではないかと思います。

お知らせ

**日本共産党演説会**が開かれます

8月31日（日）午後2時 鈴鹿市文化会館

元衆議院議員 **瀬古ゆきこ** 党県書記長 **中野たけし**  
がお話します。どうぞお気軽にお出かけ下さい。

ずいそう



## 青春と海と加山雄三

7月18日夜、津市の県文化センターで「加山雄三 & ザ・ワイルドワンズ」コンサートが行なわれた。ナマで聞ける機会は今後ないかもと、ちょっと贅沢して夫婦で出かけた。客席は60歳前後の「元若者」たちで満員であった。加山雄三・71歳。ワイルドワンズのメンバーも全員、還暦を超えているが、なつかしい「湘南サウンド」、エレキギターの音色と歌声は、昔のままであった。ムードは最高に盛り上がり、アンコールが30分も続いた。

### 60～70年代、高度経済成長の光と影の中で

1960年代から70年代、昭和では40年代、私が中学生から大学生であったあの時代は、いま思い出しても元気な、何か夢と希望のあった時代である。「若大将」加山雄三は、そんな時代の先端に行く象徴で、いまはもういない「スター」、憧れの星だった。「幸せだなあ、ぼかア君といるときがいちばん幸せなんだ」というキザなセリフも、スターの口から堂々と出るとカッコよく、聞いている方が恥ずかしくなったりした。

海と太陽とヨットと恋、カラッとしたエレキギターのリズム、青春を謳歌する若者たち。多くの庶民の実際の生活はまだまだ貧しかったが、若大将たちのような暮らしをしたいという憧れを胸に、がんばって働いた。

同じ時代に、貧困や不正義とたたかう若者の群像を描いたドラマ「若者たち」も、人気があった。「君の行く道は果てしなく遠い。なのになぜ歯を食いしばり、君は行くのか」のフォークソングと共に登場する、労働者の代表・山本圭も、またカッコよかった。

われわれ当時の若者は、加山雄三も山本圭も、どちらも自分たちの仲間のように感じ、コンパで飲むと歌謡曲もフォークソングも、肩を組んで歌った。若者だけでなく、老いも若きも同じ歌を愛唱した。高度経済成長の光と影の、そのどちらにも共感をもちながら過ごした時代だった。

当時も「格差」社会ではあったが、下の方から生活が良くなっていく実感があつた。いまの「格差」は、上から下に転落していく、社会の底がどんどん下がっていくような構造だ。これでは、若者たちが夢や希望、憧れをもって生きていけない。ここが解決すべき、いちばんの問題だ。